

教育の情報化と ICT Connect 21 の活動 (パネルディスカッション)

オーガナイザ：田村恭久（上智大学）

世界各国における初等中等教育の情報化は、研究段階から試験導入や運用の段階に移りつつある。また、TCO の低減や相互運用性の保証を目指す各種の標準仕様が徐々に実用フェーズに入りつつある。国内でも、省庁・自治体・学校が教育の情報化の実現に向け検討や試験導入を進めており、併せて様々な仕様やガイドラインが整備されつつある。これらの対象は電子教科書・教材自体のみならず、クラウドプラットフォームの利用、学校情報システム、学習記録データの蓄積と利用といった多方面に渡る。こういったなか、ICT Connet21 (<https://ictconnect21.jp/>)が 2015 年 2 月に設立された。これは「学習・教育オープンプラットフォーム」に関連する技術の標準などを策定し、その普及を図り、教材コンテンツや教育 ICT サービスなどの流通や利活用を促進する団体であり、「ビジョン委員会」「技術標準化 WG (ワーキンググループ)」「普及促進 WG」が議論を開始している。本セッションでは世界各国や日本における教育の情報化の概況や、ICT Connect21 の活動内容・予定を紹介する。また、研究・シーズ、実践・ニーズ、マーケット・EdTech といった3つの側面において、教育の情報化に期待・要求される事柄を列挙し、今後の ICT Connect21 の方向性や課題を整理したい。

● 登壇者

- 栗山 健(学研教育総合研究所所長／ICT Connect21 代表幹事)
- 田村 恭久(上智大学教授／ICT Connect21 技術標準化 WG 座長)
- 岩本 隆(慶應義塾大学特任教授／ICT Connect21 普及促進 WG 座長)
- 柏原 昭博(電気通信大学教授)
- 西端 律子(畿央大学教授)
- 吉田 自由児(デジタル・ナレッジ COO)

● 発表・議論内容

- 教育の情報化に関する国内外の概況と、ICT Connect21 設立の背景と目的
- 教育の情報化に関する各種技術標準と、ICT Connect21 技術標準化 WG
- 国内の今後の展開と、ICT Connect21 普及促進 WG
- 教育工学研究やシーズの観点からの期待・要求
- 授業実践の現場やニーズの観点からの期待・要求
- 教育マーケットのオープン化や EdTech の活性化に向けた期待・要求
- パネルディスカッション:今後の ICT Connect21 方向性や課題の整理

● eラーニング教材の蓄積を活用した大学教育・生涯学習における新しい学習形態に向けて（2） （ワークショップ）

オーガナイザ：吉根勝美（南山大学），山住富也（名古屋文理大学），
津森伸一（聖隷クリストファー大学），野崎浩成（愛知教育大学），
長谷川信（岐阜聖徳学園大学）

（背景・目的）

教育システム情報学会東海支部では、これまで4回にわたり、「e-Learning 教材の共有化における諸課題の解決に向けて」、「教材データベース構築における数値情報と文字情報の整合性について」、「データ分析に基づいたeラーニング開発に向けて」、「eラーニング教材の蓄積を活用した大学教育・生涯学習における新しい学習形態に向けて」と題し、eラーニング教材に関わるワークショップを企画し、全国大会のプレカンファレンスとして実施してまいりました。

この2～3年で、“タブレット端末”を利用した教育や、“アクティブラーニング”、“反転授業”、“MOOC”といった新しい形態の学習方法が話題にのぼっています。これまで長年蓄積されてきたeラーニング教材やさまざまな教育データは、こうした新しい形態の学習にも活用すべきです。同世代の半数近くが大学へ進学する時代を迎える中、大学教育や生涯学習のあり方を再構築するにあたり、新しい学習形態の導入は当然議論の対象となります。

（内容）

東海支部では、支部活動の一つである“eラーニング勉強会”を通して、会員各自の研究成果をeラーニング教材として共同利用するという課題に取り組んでおります。今回のプレカンファレンスは、勉強会の報告を兼ねて、前回に引き続き「eラーニング教材の蓄積を活用した大学教育・生涯学習における新しい学習形態に向けて」をテーマにして、研究発表会形式で報告と討論を行います。申込み時点では、以下の報告を予定しています。

「現実データによる教材整備—もうひとつの統計教育のために」

「iPadとe-Learningを利用した反転授業の試み」

「基礎物理学の反転授業の構想」

「テンプレートを用いた卒業論文執筆指導—moodleを活用したScaffolding—」

「学生の学習意識と学習達成度評価」

社会人の学び直しを支援する大学院でのFDとMoodleレシピ (ワークショップ)

オーガナイザ：喜多敏博（熊本大学），中嶋康二（熊本大学）

2016年4月に創設10周年を迎える熊本大学大学院教授システム学専攻では、「教授システム学（Instructional Systems）の研究普及拠点の形成 -学び直しを支援する社会人教育専門家養成 [短期プログラム] パッケージの開発と普及-」というプロジェクトに取り組んでいます。このプロジェクトでは、eラーニングで社会人が学びやすい環境を整備する専門家を育成するための短期プログラムを開発し、ICT活用により横展開（全国の大学院への展開）を進めているところです。

本プレカンファレンス企画では、「ひと味違う、実のあるFD（ファカルティディベロップメント）」とも言える、その短期プログラムの一部の実例をご紹介しますとともに、実際の授業での教え方の工夫（小技的レシピ）を、Moodleを用いておこなう具体例を体験していただきます。

本企画の参加者には、インターネット接続のできるスマートフォンかタブレットを持参することを推奨します。ワークショップの開始時間までに、

<http://tkita.net/moodle/ws2015-0901/>

に当日持参予定のスマートフォンかタブレットでアクセスし、準備して臨んでいただければ幸いです。QRコードでのアクセスはこちら：



**編集担当委員が語る JSiSE 論文投稿入門 –教育実践をいかに論文化するのか？–
(チュートリアル)**

オーガナイザ：JSiSE 学会誌編集委員会

学会誌掲載論文は学会の顔であり、投稿の質・量の向上が望まれます。JSiSE の対象とする領域は、情報・教育・認知といった異なる学問の融合した分野であり、かつ、近年の e ラーニングや ICT 活用教育の普及に伴い、従来とはまったく異なる対象分野や、教育機関のみならず各種職業分野における応用実践が急速に広がっています。

特に、教育実践研究は JSiSE の活動の特徴でもあり、編集委員会でも実践論文のあり方に関する議論を積み重ねてきました。今回は、昨年度に引き続き「教育実践をいかに論文化するのか？」をサブタイトルに掲げ、実践研究の体系的な方法論やその事例を考察していきます。また、論文の採録基準や査読の進め方についても解説を行います。現在、編集委員会内で検討を重ねている新たな論文カテゴリーの新設についても、検討状況をご紹介します。

チュートリアルでは、以下のような項目について、論文査読を担当している編集委員が解説を行います。

- 論文投稿から掲載までの流れ、投稿に際しての注意
- 論文種別と採録基準 –現状と改訂の方向性–
- 査読の観点と査読コメントに対する対応のノウハウ
- 教育現場の取り組みを実践系論文にまとめるには

特に最後の「教育現場の取り組みを実践系論文にまとめるには」については、編集委員会の中でも、特に医療・看護分野の人材養成における教育システムを活用したさまざまな取り組みを実践論文としてまとめられた経験をお持ちの真嶋由貴恵先生に、現場の取り組みを実践論文化するにあたって、迷いがちな点・困りがちな点・見落としがちな点などを挙げていただき、またそれらに対する基本的な対策をお話しいたします。

これまで論文投稿をしたことが無い方、研究をまとめたいのだが論文として求められるレベルがよくわからないという方、実践研究を進めるうえでのポイントやヒントが得たい方のほか、査読を行う際の考え方を整理したい方にも有用な内容と考えております。ぜひふるってご参加ください。

登壇者 氏名・所属：

小西 達裕（静岡大学）・瀬田 和久（大阪府立大）・笠井 俊信（岡山大）・真嶋 由貴恵（大阪府立大）

情報技術を利用した産学官連携人材育成の現状と問題提起 (ワークショップ)

オーガナイザ：夜久竹夫（日本大学），JSiSE 人材育成委員会

ICTを利用した人材育成は活用が広がっていて、すでに広く活用されている分野としてICT分野の人材育成があり、同時に他分野の人材育成も行われつつある。しかしながら、最新の事例については教育関係者の間で必ずしも広く周知されているわけではない。

そこで、本プレカンファレンスでは関係者をお招きして、ICT分野の人材育成におけるICTの利用と最近の動向や、他分野の人材育成におけるICTへの問題提起等をお話していただくワークショップを行う。

初めに人材育成の最近の事例として（１）産官学連携によるIT人材育成の事例と、（２）産学連携による高度IT人材育成における取り組みを報告いただく。さらに、（３）今後ICT利用の人材育成が求められている土木分野の人材育成について、ICT分野への問題提起をしていただく。さらにその後、ワークショップ参加者と、人材育成における更なる活用の方法や今後の課題について議論する。

パネル講演

1. 大蒔和仁（東洋大学総合情報学部、産総研名誉リサーチャー）、「産学官連携によるIT人材育成の事例」
要旨：産業技術総合研究所に在職中に特にITの人材育成についてはつくばよりも東京に拠点を置く必要性を強く考え、秋葉原に進出したいと考えた。セキュリティ関連とグリッド関連のグループを置いた。その経緯を報告する。また数年前に東洋大学総合情報学部（川越）に異動しそこで川越周辺の中小企業の技術者を前にITの、特にオープンソースソフトウェアとアルゴリズムの話を中心に講義をした。そ印象を述べる。
2. 下房地毅（IPA・IT人材育成本部）、「産学連携による高度IT人材育成の課題と今後の方向性」
要旨：IPAは文科省と経産省の産学人材育成パートナーシップの下、大学等の高等教育機関におけるIT人材の育成に産業界の支援を加えた実践教育の展開をプロモートして来た。今、ITの利活用によりイノベーションを起こせる人材の育成が求められており、IT融合、デザイン思考、起業家をキーワードに、今後のIT人材育成の重点化方向について私見を報告する。
3. 二宮利江（東京大学大学院情報学環）・鈴木雄吾（東日本高速道路株式会社）、「高速道路事業における技術者育成」
要旨：2011年に東日本高速道路株式会社（NEXCO東日本）と東京大学大学院情報学環の間で「情報社会基盤に関する研究協力協定」を締結し、その一環として「行動観察手法を用いた点検業務の改善」に関する研究を開始した。実業務の作業分析や行動分析を実施した結果、技術者育成に課題と可能性があることが判明し、2014年より研究対象を高速道路事業の技術系業務に拡大し、高度な技術者育成の仕組みを検討している。

目指せ、英語による論文投稿・発表
～ 学生・若手研究者のチャレンジ応援企画 ～
(ワークショップ)

オーガナイザ：鷹岡亮（山口大学），JSiSE 人材育成委員会

国内学会の全国大会や研究会で発表を経験した学生（大学院生・学部学生）にとって、次のチャレンジは国際会議における英語の発表である。また、若手研究者にとっては、研究成果を国際会議の Full Paper での採択や国際学術誌（英文誌）への投稿がさらなるチャレンジとなる。いずれのチャレンジも「自分の研究を理解してもらうための英語による発信」であり、そこでは、英語による発表の壁を自身で高く考えすぎてしまったり、自分の研究を理解してもらうための論文や発表で上手く伝えられないなど英語による論文投稿・発表に難しさや問題を抱えていることも少なくない。

そこで本プレカンファレンスでは、学生や若手研究者を対象にして、登壇者に「自分の研究を理解してもらうための英語による発信」について各々の立場で語ってもらい、失敗談を含むその語りの中での英語による論文投稿や発表の意義、論文・発表の構成の仕方や表現の工夫やコツなどを聴講者それぞれのアンテナで受け止め、共有することによって、論文投稿や発表に対する意識を高め、いくことを目的として、以下のようなプログラム構成でセッションを進めていく。

【10:00～10:05】

Part0: プレカンファレンスの趣旨説明

【10:05～10:25】

PartI: 国際会議で発表する、英文誌に投稿するために…

- 国際会議・英文誌の種類と査読の仕組み
- 自分の研究を理解してもらう論文づくりとは？
- 発表方法のコツとは？
- 研究や国際交流という観点からの国際会議の活かし方

【10:25～11:05】

PartII: 自分の研究を理解してもらうことを目指した私の経験談

- 私の失敗談・成功談
- 多文化・多国籍のゼミから学ぶ英語発表のコツ
- 自分の研究を理解してもらう発表(説明)の構成とは？
- 自分の研究を理解してもらうための英語表現の工夫

【11:10-11:50】

PartIII: 擬似国際会議セッションを体験…

- 学生(留学生含む)・若手研究者による英語(日本語)発表
- 質疑応答・意見交換

本プレカンファレンスでは、次世代を担う、留学生を含む多くの学生（大学院生・学部学生）や若手研究者の皆さんの参加を期待している。